

## 「うさぎ屋誠」考

——明治初期のある出版人をめぐって

石 塚 純 一

はじめに

明治時代のはじめ、東京の銀座に新しい本屋が店を開いた。その名をうさぎ屋といった。家庭向け実用書や実録読み物などを盛んに出版し、アイデア販売と安売り広告で話題をあつめ、明治十年代（一八七八―八八年）後半には最も羽振りのよい出版社の一つになったが、二十年代半ばになると杳としてその行方がわからなくなる。「書籍商といえば各商業の中でも、上等の業だといって定価販売にこだわっているが、自分たち（うさぎ屋）はお客様の便利を思って本の安売りをする」と新聞広告を出し、定価の三割から四割引きで前代未聞の大売出しをやるような書肆だった。

明治初期の出版といえ、まだ江戸時代以来の本屋仲間の結束が強く、また新政府が官版をしきりに発行し、それらの合間を縫うように私版（自家出版）が刊行されるという状況である。書林仲間に加盟した本屋からは、戯作

調の小説・実録物や、文明開化を象徴する啓蒙書、翻訳小説や政治小説などが出版され、民権論や政治的主張を盛った雑誌が私版として各地で出版された。慶応年間の『西洋事情』をはじめとする福沢諭吉の著書は、次々とベストセラーになり、偽版が出るなど話題に事欠かなかったが、『学問のすすめ』（明治五年）の刊行の後、独自に出版しようとした福沢に書林仲間からクレームがつき、書肆と著者の慣習的關係に腹を立てた彼も「福沢屋諭吉」の屋号で書物問屋に仲間入りしなければならなかった話は有名である。

また、活版印刷の技術が移入され活字が開発され、従来の整板（木版印刷）と競い始め、両者が並行して行われていく時代である。私版をはじめとして、丸善や慶応義塾出版局など、新興の出版社が徐々に出現し、次第に旧来の書肆に代って主導権をにぎっていった。

うさぎ屋（兎屋）はもっぱら活版で印刷し、明治十年代に活躍した新興出版社の一つである。兎屋については、内田魯庵の「銀座繁盛記」、田山花袋『東京の三十年』、そして内田魯庵の上記の記述を引用して明治初期の出版界について語った前田愛「明治初期戯作出版の動向」など、いくつかの興味深い証言や考察がなされているが、その活動の全般についてはほとんど知られていない。

兎屋はどのような本をつくり、どんな売り方を考え、何をやろうとしていたのか、忘れられた出版社の相貌を、断片的な記録からモザイク風に描き出してみたい。

## 一、兎屋についての証言

内田魯庵は「銀座繁盛記」（昭和四年）のなかで次のように語っている。

表通りでは無かったが、裏煉瓦に兎屋というのがあった。兎屋と云っても今は余り知ってるものはあるまいが、兎屋本と云つたら一時は全国を風靡した大量生産の出版の元祖であった。それではドンナ本が出版されたかという、記憶に残ってるものが一冊も無いと云うほど夫程、愚にも附かない碌でも無いものばかり出版して、到頭馬車(円太郎馬車じゃ無い)を乗廻すまでに漕付けたというは矢張り銀座でなくては生れない怪物だつた。(中略)

兎屋というのは屋号で、望月誠が本名であつた。著者よりは出版人で売る流儀で、表紙にも扉にも兎屋誠と麗々しく署名したのが著者よりも目立つたから兎屋誠で通っていた。尤も多少文筆の才があつたか祐筆を抱えていたかして、自ら編述したものの出版が多かつた。無論糊と鋏で細工したものばかりで、兎屋の出版に一冊として碌なものは無かつた。「女房の心得」とか「亭主の心得」とかいうような「是だけは心得べし」式の安価家庭書が多かつたが、中には書名を挙ぐるだに顔を赤くするような露骨の題名の生理書や衛生書も沢山あつた。(中略)愚書俗書愚本凡本の濫出であつたが、衆愚の傾向を洞察する鋭い着眼と、直ぐ其の要求に適合する新著を案出する敏捷な技量があつたと見え、糊と鋏で粗製濫造したものが大抵中つてグングン伸びて行つた。本屋で馬車へ乗つたのは恐らく兎屋が初めてであつたろう。<sup>\*1</sup>

田山花袋は『東京の三十年』(大正六年)で、彼が有隣堂という書店の丁稚をしていた明治十四年ころを回想して、「(銀座)尾張町の角に、博聞社と言う本屋があつて、後にそれが兎屋書店となつたが、その兎屋も今は跡方もない。」と述べている。<sup>\*2</sup>しかし、記録によれば博聞社は明治二十年代後半まで出版・印刷会社として活動していたので、<sup>\*3</sup>兎屋が博聞社の跡を襲つたというのは記憶違いであろう。ただ兎屋という出版社が、少年時代の花袋にも強く記憶さ

れるような存在だったことはたしかである。

前田愛は「明治初期戯作出版の動向」（昭和三十八年）で、内田魯庵の先の文を引用し、明治の新聞広告にみる兎屋の誇大広告をとりあげ、大胆な値引き販売、景品付き販売、書籍切手の発案などに注目し、江戸時代以来の戯作出版と新興の兎屋の出現について次のように結論づけている。

兎屋は書籍をたんなる商品に還元することにより近世的な販売機構を解体させる役割を果たしたが、博文館や富山房の基礎をつくった叢書、全集、辞典などの長期にわたる堅実な出版計画を欠いていたために、はやくも二十年代の初頭には没落してしまう。その投機的な経営方式は、手工業的な木版印刷に依存する近世型の書肆に代って、資本主義化した近代的な出版業者が登場するまでの過渡期を象徴するものといえよう。<sup>\*4</sup>

うさぎ屋は、なにやらあやしげな出版社だったらしい。しかし、明治初期にある意味で現代に通じるような大衆志向の、商売に徹した本屋が存在していたことは不思議な気さえする。

## 二、うさぎ屋の出版活動

兎屋関連の出版書目と販売活動の記録を年次にしたがって追っていくが、その前におよそどのような種類の本を出したのか、また資料に現れる兎屋関連の人物や、本屋の名称などを整理しておきたい。兎屋関係で出版された本のうち、把握しえた百三十冊ほどの書目の種類を大別すると、実録もの（歴史読み物）、戯作、家庭実用書、翻訳小説（政治小説）、法帖類となる。当時新興の出版社は雑誌を盛んに刊行したが、兎屋は発行していない。兎屋の刊行物はすべて活字版で印刷されている（装丁は和本形式も含まれる）。奥付を見ると、他の書肆と共同で刊行し

たもの、売捌き所欄に名を連ねているものも数点含まれ、当時どの書肆もそうだったように出版と売り捌き（書店）を兼営していた。

### 屋号——うさぎブーム

つぎに「うさぎ屋」という屋号についてだが、「うさぎ」という言葉を選んだのは、主人の名である望月〓満月〓餅搗きうさぎというアナロジーからであろう。仮名垣魯文が書いた兎屋広告文（後出）にもそれらしいことが出てくる。また、明治の初頭にうさぎが大流行したという事実があった。命名と直接関係はないかもしれないが一寸紹介しておこう。うさぎの毛色や異形を競い、外国からも輸入されたうさぎが高価に売買され、投機の対象になったという。「新聞雑誌」七六号（明治六年一月）は、東京府が注意の布達を出したことを報じている。それによれば、兎会なるものができて多数の人が集まり、格別の高価で売買しているが、これは心得違いもはなはだしい、破産の元だと府庁は区々戸長に対して布達した。そのなかに「右兎会ハ昨年十月頃ヨリ起リテ日ヲ遂ヒ盛ニ行ハレ終ニ所々待合茶屋等ニテ日々集会シ、種々ノ兎ヲアツメ高価ヲ争ヒ毛色ヲ競ヒ、之ガ為メ戸外市ヲナスニ至レリ」とある。うさぎが当時、世間の話題をあつめていたことと、この変った屋号との間に全く関係がないとはいえない。

出版を始めた当初は、「望月誠」「思誠堂」「うさぎ屋誠」の版元名が使われ、明治十四年以降「兎屋」「兎屋誠」「天狗書林兎屋誠」など、さまざまに名乗るようになる。望月誠がうさぎ屋の主人の本名で、彼が自ら翻訳、著述し、編者となって十数冊の本を刊行することから出発した。明治十四年ころから他の著者の本を出しはじめ、出版・販売の経営者となる。出版販売活動が盛んだった時期は明治十三年から二十一年ころまでで、二十三年を最後にぱつ

たりとその名が見られなくなる。以後二十年間の足どりは不明だが、明治四十二年から四十五年にかけて、兎屋ではなく他の版元から望月誠編『平仮名と万葉仮名』など数冊の書道関係の本が刊行され、このころまで望月誠は健在だったことがわかる。

以下では、新聞広告（郵便報知新聞は「報知」、東京日日新聞は「日日」、東京朝日新聞は「朝日」と略す）、国立国会図書館の蔵書、石川巖『明治初期戯作年表』などに現れた、兎屋・望月誠・思誠堂という言葉を手がかりに兎屋の活動を追うことにする。私が実際に見た書目を中心に記し、文末に記録上確認できた出版書目を年譜として掲げる。

#### 明治五年・六年

望月誠編『訓蒙窮理便解』（明治五年九月、甘泉堂刊）。

望月誠の初出である。本書は洋装本で、引力・遠心力といった物理学の基本的な事象をわかりやすく、図入りで解説したもの。その「緒言」に、「人トシテ事物ノ道理ヲ知ルコト無カル可ラス知ルコトナキハ禽獸ニ近シ」といい、

「（余）黄啄ノ身ヲ以テ之ヲ邦語ニ訳シ 婦人小児ノ惑ヒヲ解キ物理ノ大概ヲ曉サントス 故ニ勉テ俗語ヲ用ヒ人ノ解シ易カラシコトヲ希ヘ」とあり、洋書を翻訳し抜粋して婦人子供に向けて紹介したことがわかる。版元の甘泉堂は江戸以来の大書肆、和泉屋市兵衛こと山中市兵衛である。山中市兵衛は幕末に錦絵や小説類、明治四年に「万国新聞」という活字新聞を発行、またミル著／中村正直訳『自由の理』を出版。翌五年に『学問のすすめ』『分権論』などの福沢諭吉の著書を発行している。<sup>\*6</sup>

明治六年には、可德斯米（ゴールドスミス）著／望月誠訳『万国地理啓蒙』を和泉屋市兵衛から刊行する（未見）。

明治九年

望月誠編『英和商語集』（十二月、望月誠刊）

商業取引に必要な語を収録した小型の英和辞典で、望月は序文で自分の仕事上の必要から訳語を個人的に調べ、記録しておいたものを広く刊行すると述べている。この序文は望月の個人情報に関するわずかな手がかりをあたえるが、それについては後述する。ともあれ、前二著と本書の内容から、望月が英語に通じていたこと、プラクティカルなものへの関心が強かったことをうかがわせる。

明治十一年

望月誠著『女房の心得』（九月、思誠堂刊）

望月誠著『亭主の心得』（十月、思誠堂刊）

内田魯庵の「銀座繁盛記」にも出てきた本で、三十ページほどの薄い冊子。家庭経済こそ社会の基本であるという考えに基づき、家庭生活を円満に営むために女房、亭主のあるべき態度・心得をこまごまと箇条書きにして示す。後者では、女房の仕事は亭主に勝るとも劣らないから、自分の職業の煩苦勤労を自慢らしく女房に聞かすな、女房の煩勞をいたわれとか、年数を経た夫婦の間は「和合せざるものなりこの過失は多くは女房に非ずして亭主にありとす戒しむべし」とか、女性に対して亭主の横暴をいましめる言葉が目をはひく。版元の思誠堂は望月が最初に名乗つ

た社名で、以後兎屋と併行し、刊行物によって使い分けられていく。その住所が確認できるのは明治十二年一月刊行の『致富の要訣』の奥付からで、東京京橋区南鍋町一丁目七番地とある。現在の銀座五丁目、数寄屋橋に近いみゆき通あたりである。

明治十二年——家庭論と商売論

望月誠著『致富の要訣』（一月、思誠堂）

望月誠著『記憶拡充論』（七月、思誠堂）

望月誠著『おさんの穴』（八月、思誠堂）

望月誠著『活計論』（九月、うさぎや誠）

望月誠著『商人安心論』（十月、思誠堂）

望月誠が積極的に書き、出版した時期である。うさぎや誠という屋号が初めて現われる。これらは概して三十七十二ページほどの薄い本だが、庶民向けには功を奏し、版を重ねている。家庭経済にとって支出のやりくりよりは、収入をどうするかの方がはるかに大事だと説く『活計論』、女中の心得を面白おかしく説いた『おさんの穴』、商売・商業の重要性と商取引の基本を具体的に説いた『商人安心論』など望月の出版のモチーフは、家庭と商売にあったといえる。

『記憶拡充論』はページ数も七十二と多く、上記の本とは趣を異にする。洋書を元に書いていることは間違いないが、人間にとって「記憶力」は、審決力や思慮、論理とはまったく異なる能力だということわり、単なる記憶より理



解力が大事だといいつつ、その上で記憶力を高めるにはどうしたら良いかを論じるもの。なかなか論理的に書かれていて説得力がある。そのことは、国会図書館に残るこの本の旧蔵者が、本書の欄外に「快論にて」とか「賛成」とか「洋学生徒語学ノ譜記ニ当テ之ヲ○セヨ」などと書き込みをしていることからわかる。巻末にこの旧蔵者の署名があり、誰が書込みしたかが判明する。「此本ハ論理上ノ事ノミヲ記セシモノニシテ生理健全上ニ係ルモノ甚ダ少キ故記憶拡充ニ志アルモノハ他書ニ就キ生理健全上ヨリノ諸説ヲ見〇〇バ大ニ益スルトコロナルベシ 楽善堂主人放膽識」とある。楽善堂主人とは、明治の新聞人で目録〈精琦水〉で薬業「楽善堂」を銀座に開いた岸田吟香（一八三二—一九〇五年）その人である。また宮武外骨が、明治二十年代に「記憶術ということが大流行であった」と記しているが、望月はその十年も前に記憶術の本を出したのだ。

#### 明治十三年

望月誠著『手軽西洋料理法』（一月、うさぎ屋誠刊）。

明治十九年に駿々堂から再刊されている。

松村操著『家政妙論』（三月、思誠堂）

兎屋の主要な著者となる松村操が初登場する。一月六日の新聞広告（「報知」）には、『手軽西洋料理法』をはじめとする家庭の実用書や、『男女淫欲論』『男女交合論』といった、内田魯庵が「書名を挙ぐるだに顔を赤くするような露骨の題名の生理書や衛生書」に当たると思われる書名が並ぶ。『手軽西洋料理法』は仮名垣魯文の『西洋料理通』（明治五年、梶屋喜兵衛）を真似ているが、魯文が書いていない食事のマナーについての記述が加えられ

て興味深い。本の価格は十銭から二十銭が多い。『男女淫欲論』『男女交合論』は残念ながら未見だが、『女房の心得』や『おさんの穴』の書きぶりから想像すると、タイトルから受ける印象ほど興味本位のものではなく、おおまじめに論じたものかもしれない。これらの家庭向け実用書は重版を重ね、明治十六年には『伝家宝』という書名で合本刊行され、庶民の間で広く読まれたと思われる。

明治十四・十五年——出版のはばが広がる

中村敬字（正直）著『敬字先生詩文偶抄』（兔屋誠）

津田権平著『明治立志編 一名・民間英名伝』（兔屋誠）

松村操編『明治外史』（思誠堂）

松村操編『演説金針』（思誠堂）

（以下は明治十五年）

トーマス・モール著／井上勤訳『良政府談』（二月、思誠堂刊）

トマス・モア『ユートピア』の初訳。

チャールズ・ Dickens 著／加藤鶴太郎訳『西洋夫婦事情』（兔屋誠刊）

松村操編『山陽言行録・象山言行録』（兔屋誠刊）

松村操（春風）編『実事譚』七冊合本（兔屋誠刊）

松村操（春風）著『日本水滸伝』（兔屋誠刊）

松村操編訳『金瓶梅』『通俗後西遊記』『通俗水滸後伝』（すべて兎屋誠刊）

明治十四から十五年になると、急に刊行書目が変化する。明治の人物伝や歴史上の事件を実録と銘打って物語った『実事譚』、『敬宇先生詩文偶抄』『明治立志編』などの漢文の書、中国の古典読み物、トマス・モアやチャールズ・ディケンズの翻訳などが並ぶ。これは松村操が著者として迎えられ、望月と親交を深めた結果と思われる。また当時、漢文学復興の気運が高まったことも関係する。兎屋と同様に新興の出版社であった鳳文館が、明治九年に開設された清国公使館と交流しつつ、大部の作詩類書『佩文韻府』全百冊などの刊行を開始、隆盛にむかうといった動きとも歩調が合っているといえるだろう。

明治二十年五月の『時事新報』の雑報欄は、書物の流行についてこう記す。「明治十三年頃には法律政体経済等の新刊書が全国にもて囃され……。同十五年の三四月頃より如何なる風の吹回しにや儒教主義の書籍が帰参を申付けられ……。其命数は最も短く翌十六年の末に至りては殆ど人間に跡を止めざる有様とはなりたり。次に勢力を得たるは小説人情本の種類にして……。ここで述べられている当時の出版物の趣向の変化と兎屋の出版傾向とはほぼ軌を一にしているといえよう。トマス・モアの『ユートピア』の翻訳者、井上勤（嘉永三→昭和三、一八五〇—一九二八）は、阿波徳島の出身で、明治十三年ころから盛んに翻訳を手がけ、ジュール・ベルヌ『月世界旅行』（二書楼）や、デュフォアの『魯敏孫漂流記』（明治十六年、長尾景弼・博聞社）の翻訳で名高い。明治十三年に大蔵省関税局に入り翻訳係りとして従事したという<sup>\*</sup>。兎屋の翻訳書はほとんど井上が担当していることから、望月との交流が深かったと考えられる。

兎屋のこの時期の書目をみるかぎり、後世に残る良書とはいえないまでも内田魯庵が「愚書俗書悪本凡本の濫出」

と馬鹿にするほどではなからう。

### 著者、村松操

松村操という人物もよくはわからないが、石川巖によれば、「越後国柏崎の人、戯作類には全然関係なき人物で、主に雑著古書、翻刻を遣った人」とあり、歴史読み物などをよくしたが戯作者ではなかったという。上記の著作や文末の年譜に記した兎屋本だけでなく、『東洋立志編』（明治十三年、巖々堂）『近世先哲叢談』（明治十三～十五年、巖々堂）『大久保彦左衛門の実説』（明治十六年、名古屋・松屋）など三十冊ほどの編著がある。明治十六年四月二十一日の新聞広告（「報知」）に、松村操著の『開巻驚奇 演義日本外史』（思誠堂刊）が載るが、その宣伝文には「平氏勃興以降治乱盛衰の事跡を小説所謂読本ぶりの口調を以て面白く綴做したる古今未曾有の奇書」と書かれておりその仕事ぶりがうかがわれる。『実事譚』は民間に流布する伝説の元になった記録を調べ実録としてまとめた本で、広く読まれ続編もつくられた。その緒言で松村は、「近古民間の事実に至てハ正史に伝ふるものをきき以て俗伝百出往々実を失ふ者少からず」といい、「頃日近世の野史雑書を渉獵し苟も事の実伝に係るものあれば抄録し」校訂を積重ねてきたと述べる。うさぎ屋にきびしい内田魯庵も本書については「同じ愚書でも『実事譚』などはやや生真面目であった」と言っている。<sup>\*11</sup>

松村操は、依田学海の『学海日録』にも登場し、明治十五～十七年ころに交流があったことがわかる。学海は松村に乞われて『演義日本外史』の序文を書いたり、『実々事譚』を謹呈されたりしている。明治十七年四月七日の日記に「松村操きのふ午時失せたりとて知らせあり。この人、余が深き交あるものならねども、年少くして才知あり。

小説を好みて著述多し。文字は未だ瑕疵多けれども、後に至らば名を為すべかりしを、いと惜しむべし」とあり、松村が突然死んだことを惜しんでいる。松村がまだ若かったこともわかり、おそらく望月誠とも近い年代で、息も合って兎屋から多くの本を出版したのだろう。これで松村操の没年はわかった。<sup>\*12</sup>

明治十六・十七・十八年

松村春風（操）『実々事譚』（五月、兎屋誠）

望月誠編『伝家宝』（四月、兎屋誠）

根村熊五郎（有信斎主人）『姦婦の改心薬』（望月誠）

根村熊五郎（有信斎主人）『夫婦の後悔』（望月誠）

根村熊五郎『交際及対話の注意』（望月誠）

滝沢馬琴『馬琴翁叢書』第一輯（乾坤堂）

乾坤堂は兎屋支店と新聞広告にいう（明治十六年二月二日「報知」）

山東京伝・望月誠編『京伝翁叢書』（乾坤堂）

（明治十七年）

曲亭馬琴『里見八犬伝』（兎屋誠）

独逸政略秘聞録（五月、兎屋誠）

英立雪『宗教世界膝栗毛』（兎屋大阪支店）

王羲之書『草書千字文』（望月誠）

（明治十八年）

福永美智編『身体衛生第一の心得』（兎屋）

十返舎一九『東海道膝栗毛』（兎屋誠）

明治十六年から十八年が兎屋の最盛期であろう。この時期には、また家庭向け実用書が復活する。しかし著者は望月ではなく根村熊五郎という人物である。根村執筆の本の発行は兎屋ではなく望月誠になっている。この人物も未詳だが、あるいは望月誠のペンネームかもしれないのでさらに調べたい。

滝沢馬琴や山東京伝の叢書を刊行し、さらに人気が高かった『里見八犬伝』の版權を獲得、活版で刊行することを大々的に宣伝し、他社と競合する様子が新聞広告でうかがえる。

文明開化といっても当時のインテリである書生たちが、みんな西洋文学を読んで議論していたわけではないことを弥吉光長は指摘している。<sup>\*13</sup>例えば坪内逍遙は「其頃の雑誌では『花月雑誌』や『東京新誌』が最も学生の間で愛読されたものだが、私は寧ろ『团团珍聞』や『魯文珍報』の上得意で、少しでも余裕があると新富座へ出掛ける、寄席へ行く。其の時分（明治十三四年頃）の東大で、西洋の純文学に多少批判的の興味を持ってゐた学生は存外少なかった」と語り（高田早苗「半峰昔はなし」）、市島謙吉は「其頃は馬琴の著作を読むことが書生間に非常に流行しました。馬琴の八犬伝を一寸心得ておらないと、同窓仲間に恥となるようなわけ」であったと述べ（市島謙吉「小精庵隨筆」）、高田早苗も小説が好きで貸本屋から『八犬伝』『三国志』などを借りて読み耽ったという。

東海散士の政治ロマン小説『佳人之奇遇』（明治十八―三十年）、逍遙の『当世書生氣質』（明治十八から十九年）、

二葉亭四迷『浮雲』（明治二十年）などのいわゆる新文学が学生たちに迎え入れられたのは明治二十年以降のことであり、兎屋はつねに読書人が何を好むかという現実をにらんで出版していたことがわかるが、出版企画においては、先を読み新しい分野を拓こうという積極性は必ずしも持ち合わせていなかった。

ところが、販売面では新しい試みを次々に打ち出している。この頃の兎屋の広告は派手で、値引き販売や景品付き販売、下取り販売、書籍切手の発案など実に面白い。まず、明治十六年四月九日の郵便報知新聞に、『伝家宝』の広告が掲載されている。その広告文によると本書は、「今般弊舗藏版中家中經濟に係る書三十種を纂輯して一の合本となし伝家宝と名けて出版」とあり、既刊の家政妙論・活計論・致富の要訣・亭主の心得・避妊懷妊自在法など三十種の書名を掲げ、これらを一冊にまとめたものであることがわかる。定価は三円だが、前金で予約したものには一円で提供すると先に広告を出したが、好評で限定三千冊を越える申し込みがあったので、追加募集をするという内容である。

同年五月七日の広告では、『明治八大家文』『敬宇先生詩文偶抄』『山陽・象山 言行録』『良政府談』など十種の硬派の本がまとめて宣伝されている。この時期は、家庭実用書の系統と、漢文系・政治思想的な書物とを意識的に分けてアピールしていることがわかる。

この年の五月から七月にかけて、『伝家宝』と『実事譚』『実々事譚』が繰り返し広告に登場する。売れ行きが好調だったのだろう。当時、このように広告を連発する出版社は他にみられない。

## ユーモラスな広告

明治十七年に入っても、新聞広告の回数、スペースの大きさ、表現上のさまざまな工夫で兎屋は他の出版社を凌駕している。二月七日の広告は、「兎屋支店開業祝いの広告」と銘打ち、全二段ぶち抜き、絵入りである（「報知」）。兎屋誠（本店）と大阪、名古屋、函館支店の支配人の四名が舞台に並び口上を述べている絵が付いている（図参照）。望月誠だけが若々しく描かれているのが面白い。名古屋支店を新たに開業した祝いに、期限付きで三割から四割引で売り、さらに二円以上買い求めた人には六十銭以下の書籍か法帖を景物として進呈するという内容である。口上には「世間一般に不景気とて嘆し候中に弊社独り盛んと申すもちと鳴乎がましく候へども活きたる眼をもちたるが幸ひに機を見時を察し世の潮勢に先んじて刊行せるゆえにや日に隆盛に趣き……」と自信満々である。他の出版社に比べて自分たちは活きた眼をもち、機を見るに敏で、時代の流れを読んでいると述べる。

また、一ヶ月後の三月十一日の広告（「報知」）では、兎屋が支店として法帖専門の店を開業したことを告げている。ここにも絵があり、兎屋誠と法帖屋すと名のる女性が並んで挨拶している。法帖屋を任された女性は兎屋の権妻らしく、その事情を面白おかしく広告文で述べるのは仮名垣魯文である。彼に宣伝文を依頼したのだろう。

「小篆より大篆と。階梯登りの楷書の肆店。篆は即ち店にして。天まで飛揚る玉兎。木に餅の生る望月家」と持ち上げ（中略）、「本舗の正史は正妻に委託。同地の権家に法帖の店を開かし。一台二妙草書を善くすと。書法の古語にもかない安全。唐からと鳴る女主の名の鈴利は硯の墨一體支那品貯ふ古法帖。」と調子がよい（中略）。「古碑柳葉の新古とも義之（ぎし）と御注文を。願ふ由の法帖演。四角な文字は不案内の。いろは翁仮名垣魯文述ぶる」。望月誠が明治四十二―四十五年にかけて書道関係の本の編者となって再登場する伏線はこの法帖屋にあっ



○書 兔屋支店開業祝いの廣告



世間一般に不景氣とて歎し候中、弊店獨り盛んと申すも  
ちと鳴呼がましく候へども活きたる眼をもちたるが幸ひ  
も機を見時を察し世の潮勢を先んじて刊行せるゆゑあや  
日々隆盛に趣き今度また名古屋も支店開業仕候處是亦  
大坂函館兩支店同様繁昌仕候間、昨午催し候祝ひ賣の  
例に倣ひ本月三日より十三日迄十一日間左の目錄の通り書  
籍並に墨帖非常の減價にて發賣仕候上、景物呈上別して  
二圓以上御買入の御方へ此目錄中定價六十錢以下の書  
籍また墨帖の一種景物として呈上可仕候又府外の御方  
へ來る十七日迄は御送金の上御注文被下候へば右日限と  
看倣し同様の減價にて景物も相添へ速く送本可仕候殊に  
三圓以上の御注文なれば送料も弊店より於て相辨じ可申  
候以上

「つゞぎ屋誠」考

「郵便報知新聞」明治17年2月7日の広告(部分)

法帖店開業廣告

小篆より大篆と。楷、行、草の楷書の肆店。篆へ即ち店よし  
て。天字で飛揚る玉兔。木と餅の生る望月一家。眞行草の  
三府は勿論。永字八法諸々方圓諸  
縣支店の連綿たるへ。書家よ所  
謂中山の兔屋なりと稱すべし。本  
舖の正史へ正妻と委託。同地の權  
家と法帖の店を開かし。一臺二妙  
草書と善すと。書法の古語にもか  
あひ安全。唐からと鳴る女主の名  
の給利へ現の墨一體支那品貯ふ古  
法帖。開店の本日。鶏鳴曉を告  
る天香の頃より。人文鳥の跡引も  
切らず。古碑柳葉の新古とも義之  
くと御注文を願ふ由の法帖演。四角な文字へ不案内の  
ころは翁假名垣魯文述



三月十日開業七日間  
祝ひの爲め直引發賣  
法帖屋をハ  
南鍋町一丁目七番地鍋町學校の隣  
兔屋支店

誠屋免

「郵便報知新聞」明治17年3月11日の広告

たのかもしれない。

### 兎屋の支店展開

先に名古屋支店開業の広告を出したが、兎屋は大阪と函館に支店を持っていた。さらに明治十六年六月四日には、横浜代理店を開業する広告が出た（「報知」）。支店は主に販売店であったが、英立雪『宗教世界膝栗毛』は大阪支店から刊行されている。東京、大阪、名古屋、横浜と大都市に支店を設けたのは理解できるが、函館にもあったのはどうしてなのか、今後さらに調べてみたい。

### 図書券のさきがけ

明治十七年三月十九日には、「書籍切手発行之主意」という広告を出す（「報知」）。書籍切手とは、今でいう図書券のことである。さすがに全国共通どの店でも使えるというわけにはいかなかったが、発想は明らかに図書券をめざしたものだ。広告文にいう。

凡そ人に物を贈るに食物など総て贅沢品を以てするは無益の事にして且卑し、之に代わるに書籍を以てするときは其贈物を受けたる人の益も大にして望まざる書籍を贈るも詮なきことゆえ此切手を贈るときは其人びとの望む書籍に引替るの便あり、又在郷の父兄より東京に遊学せらるる子弟に書籍代価を郵送なされ候節は此切手御用いなされべく然るときとも成るの便あり又各地方より郵便為替にて書籍代価御送りの手数および為替料を省き候の便あり、此三大便益あるにより書籍切手発行仕候也。

切手は十銭から百円まで数種類つくった。ただし、この切手は金員と交換は出来ないこと、兎屋だけで他には流通できないことを付記している。どれだけ利用されたかは不明だが、発想は実にユニークで、先見の明があったといえるだろう。また兎屋の本が広く読まれていたから出来ることだった。

十七年五月十五日の新聞広告では、『里見八犬伝』が大々的に売り出される（「報知」）。そのセールスポイントは、①九月十日に全巻一括で出版 ②揃い定価十円のところ予約者には六円で販売（二円を証拠金として予め払い込む）③本文の理解を助ける「批評」を加え（斎東野人執筆）、挿絵入り。広告には出版人兎屋誠と肩を並べて、「賛成者」として馬琴の孫三名の名前を連ねている。

一週間後の五月二十二日には、東京稗史出版社が「八犬伝再度ノ予約広告」を出して、兎屋に対抗する（「報知」）。こちらの仕様は、半紙摺り合本四十二冊（予約価五円五十銭）と薄葉摺り合本七冊（価七円）とある。これも七月三十日に全部一時に刊行とうたっている。また、「本書ハ日本紙なるを以て西洋紙と違ひ保存に適し、殊に薄葉摺ハ頗る携帯に便なり」と兎屋版との違いを強調する。

#### 日本一 の天狗書林

兎屋は、同書を刊行後、十一月七日の新聞で重ねて売り出し広告を打つ。そのタイトルは「日本一 の天狗書林兎屋売出し広告」、「八犬伝」の出版はこの三、四年のうちに四、五ヶ所からなされているが、途中で廃止するものや、予約金を受け取りながら資金に乏しく刊行が遅延するものなどがあるなかで、わが兎屋ひとりその全部を一時に出版したので「鼻を高くするも道理でハござらぬか」と述べ、印刷製本の美麗さを誇り、「今度鞍馬山の僧正房より

天狗の称号を授けられたり」という（これ以後、「天狗書林兎屋誠」と名乗るケースが多くなる）。そのお礼として景品付き販売をするとし、二円以上買った人には木綿一反、三円以上の人にはくじ引きで「八犬伝」か御召縮緬一反が当たるといふものである（「報知」）。

景品付き安売りの広告は、明治十八年十二月十七日の東京日日新聞にも掲載された。兎屋はいつも何かの祝いと称して特売を行なうが、この時の祝いは、「日本一の奇美談語きびだんごなる八犬伝原版本買い入れの祝いと、窮民五千八百人へ白米施行目出度く相済みたる祝い」だった。年末に慈善事業として米の炊出しでもやったのだろう。本屋のパフォーマンスである。そして、書籍原値もとね売りの大安売りと「実に古今無類の奮発」と、景品付き販売を打ち出す。一円以上買い上げの人にはフランネル襟巻き、三円以上は白さらし木綿一反……十円以上はケツト、百円以上は本黄八丈一反博多帯一筋など十六段階の景品を用意した。兎屋の本を百円以上買った人はいたのだろうか。

このような派手な広告は兎屋独特である。新聞広告を見る限り他の出版社で同様のものは見当たらない。人の目を惹く窮民救済のイベントなど、兎屋はお祭り感覚で出版をやっているような印象すら受ける。

#### 明治十九年以降

調べのついた範囲だが、明治十九年刊行の書目は四点、明治二十年は八点、二十一年は七点、二十二年四点、二十三年はわずかに一点、二十四年以降は確認できない。二十三年以降、出版活動を積極的に行なわなくなったのではないかと思われる。その後二十年間は空白で、先に触れたように明治四十二―四十五年に至って、望月誠編で書道関係の本が三楽堂その他から数点刊行されたのである。

この明治二十年前後の書目には、望月誠の著書が二冊、『英語文通自在』（明治十九年、望月誠刊）と『商用簿記』（明治十九年、兎屋刊）が含まれ、中村豊之助編『通俗大日本史』、同編『美少年録』（明治二十年、兎屋誠）、翻訳小説に、維児機胡林斯「ウエルキー・コリンス」著／井上勤訳『政治小説妻の嘆』（明治二十年、兎屋書店）などがある。明治十三年以来、望月誠の著書は途絶えていたが、英語の本と簿記の本が刊行された。『政治小説妻の嘆』はコリンスの「夫と妻」の前半を訳したものと柳田泉は注記する。<sup>\*14</sup>

明治二十一年、二十二年刊行の書目には、兎屋らしくない時事的な本が増える。井上勤訳『六ヶ月間英語卒業書』（明治二十一年、望月誠）と、英国ジョージ某著／鳥尾岩太郎訳『政治小説小人国発見録』（明治二十一年、兎屋誠）の二冊は従来の路線を継ぐものだが、『郵便路線町村里程分図詳覧』（二十一年、兎屋支店）、『町村制度適用等級課税均一算』（二十二年、兎屋支店）、『帝国議會衆議院選舉人心得』『帝国憲法説明通俗問答』（共に二十二年、兎屋）などは、帝国憲法発布（明治二十二年）と翌年の総選挙・第一回議會に関わるという意味では時宜に適うが、従来の兎屋路線とは異なる書目である。

明治二十一年になると新聞広告はめっきりと回数が減るが、十月十一日の東京朝日新聞にはほぼ全五段を使って特別安売り広告が掲載された。掲げられた三百七十点の書目の中には『経国美談』（矢野文雄、明治十六年、報知新聞社）『佳人之奇遇』（東海散士、明治十九年、博文堂）『西国立志編』（スマイルズ著／中村敬宇訳、明治四年、静岡・木平謙一郎）『ウエルキーソン氏第一リード独案内』（明治十六年、三省堂ほか）など、他社で刊行された過去の大ベストセラーが含まれており、兎屋本だけの広告ではない。これまでは版元としての広告だったが、売り捌き書店としての兎屋の広告となっている（明治二十一年八月の「報知」広告には「卸売・小売 兎屋誠」とある）。

販売目録として掲載したのだろうが、状況の変化が感じられる。

#### 書籍交換便利売り

また、この広告の冒頭に、先に一千種の書籍を甲乙丙の三回に分けて売り出す予告をしたが、乙の部の時期になっても、主人望月誠が旅に出たまま戻らぬので、書目の組み立てが出来ない、「留守番共がチョンの間仕事に非常無類の大安売りを」と説明している。

主人が旅に出て戻らない事情は次の十月十七日の広告（「報知」）にも書かれている。これは「書籍交換便利売」と題され、前回十一日に広告掲載した三百七十種の書目を期間内に買った人は、一年後の同月に買い求めた本の値段の三割引で、他のどんな本とでも交換するという内容である。「全体稗史小説等の書類は一度御覧済みに相成候へば多くは御不要に属し候ものなれば」と、稗史小説の類の性格を言い当てており、また明治二十年代に入り、稗史小説の需要に陰りが見え始めた状況を表わしているともいえよう。兎屋の出版に対する姿勢で感心するのは、こういう覚めた目をもっていたことである。卑俗なものは卑俗だと認める態度である。単に流行を追っただけではなかった。

この広告にも主人が奥州旅行に出掛けたまま帰京の予定を過ぎても戻らないとあるが、これについては後述しよう。

## 家庭百科便覧

明治二十二年の新聞広告は、東京朝日では三回だけである。五月十七日は、書目なしの小さなもので、「久しく大安売出しを以て御機嫌伺はざりし処作今四方の諸彦より続々御勧告有之候付今日より二週間大売出し仕候以上天狗書林兎屋誠」とそつけない。つづく六月二日には久々に大きな広告が載ったが（「朝日」）、新刊といってもさまざまな雑書を一冊に集めたいわば「家庭生活便覧」あるいは「家庭百科」のような本で、タイトルは『寶』という。全二冊に収めた内容の細目は数千になるといい、こういう書物は西洋では愛読されているが、「わが国には古来未だ有らざる最大珍書なり」と、兎屋らしい語り口で宣伝する。内容の一部が掲げられ、万国図、全国鉄道線図、全国温泉名称、全国各地物産表、花園培養法、造家法、西洋料理法、和服裁縫案内、女用文章、英語用文章、俳諧手引草、少年立志の手引等々一〇九点の資料名を挙げている。役に立ちそうな資料を一冊にまとめた百科便覧であり、苦肉の策という感じがしないではないが、この類のものとしてはおそらく最も早い刊行物であろう。「現今欧州各国に於て愛読される所の雑書の体にならひ編纂せしもの」と洋書を参考にしたらしい。

近代日本における百科事典の刊行は、イギリスの小百科事典《Chamber's Information for the People》の翻訳が最初で、明治六年に計画されたこの国家事業は、箕作麟祥らが中心となっておこなわれ、明治十六年に有隣堂らが翻刻したが、兎屋の『寶』は自力で集めた便覧として百科事典的な刊行物の早いものの一つだったことは間違いない。<sup>\*15</sup>全二冊で定価五円、予約前金払い特別割引価一円三十五銭だった。この『寶』を最後に、兎屋から目立った書籍の刊行は見られなくなる。

## 望月誠旅に出る

望月誠はどうしたのか。先にみた二十一年の「書籍交換便利売り」の広告には「主人事一昨年奥羽地方夏季漫遊相試み候処本年は秋季漫遊を思ひ立ち、過般来右地方漫遊仕居、此頃帰郷の予定に候処、遂に旅の興に乗じ此所より彼所と歩を進め今暫く帰郷不仕候都合に相成候」と、主人が奥羽旅行に出たまま帰って来ないので留守番どもが「脳汁をしほりて」考えた愛読者利便の法だと書いてある。

望月誠は二十年と二十一年に、二年続けて長期の旅行を行なったのだ。出版販売に成功して車を乗り回していたと内田魯庵が述べていたように、たしかに出版で儲けたのだろう。しかし、留守番たちが書いたという広告にみる主人の長期旅行と、この頃の出版物の停滞とを合わせて推測すると、望月誠は次第に出版に対する意欲を失っていったのではないかと考えられる。書店は引き続き開業していたが、安売りを連発すれば定価で買う客は少なくなる。あるいは経営的に苦しくなったのかもしれない。こうして二十三年以降、兎屋と望月誠の名は記録から消えて行くのである。

## 三、望月誠の肖像

うさぎ屋誠、本名望月誠の事績は今のところ、上記の出版物や広告記事で知りうることで以外ほとんどわからない。生没年も未詳である。出版社の歴史はそもそも出版物の歴史であり、出版人や編集者は陰の存在として表にあらわれなくても不思議ではない。それにもかかわらず、ある一連の出版物がどのような意図で刊行され、出版人はその過程にどのようにコミットしたのかを知りたいと思う。ことに明治初期という近代出版の黎明期に、既成の書物問



屋仲間の支配下にあつて新たに本屋を興そうとした人々の意思と試みを掘り起こす必要があるだろう。望月誠は何を考えていたのか、彼自身の言葉からそれをうかがってみよう。

望月誠の最初の著訳書は、明治五年の『訓蒙窮理便解』だった。この書名からただちに福沢諭吉の『訓蒙窮理図解』（明治元年）を連想するが、たしかに福沢の同書が巻き起こした窮理熱なるブームにあやかつて望月は本書を著したのだろう。訳者識に、「余黄啄ノ身ヲ以テ」と記すように、彼はこのときまだ若く、おそらく二十歳台であり、しかも英語に良く通じていた。原著として、チャンプル氏の[Introduction to the science]ヤルムステット氏の[Resumed of Natural Philosophy and Astronomy]クワッケンブス氏の[Natural Philosophy]の三冊を参考にしたと述べ、チャンプル氏の書は、すでに小幡篤次郎氏訳の「博物新編補遺」があるのでその旧訳に拠ったが、大概是後二著を新訳したと、きちんと典拠を示す態度はフェアである。

#### 内務省の役人だった望月誠

次に望月が著したのは、『英和商語集』。扉のタイトルに、〈明治九年十二月印行 望月誠纂輯 [an English and Japanese Vocabulary of Mercantile terms] 〉とある。訳者識で、本書の成り立ちと自らの履歴の一端を述べる。

襄ニ内務省中勸商局ノ立ツヤ余<sup>た</sup>叨リニ吏員ノ末ニ班シ爾来専ラ翻訳ノ業ニ従事ス而ルニ本邦商語ノ翻例猶未タ備ハラサルヲ以テ操觚ノ際毎々填字ニ困メリ、余乃チ之ヲ字類ニ搜索シ随テ得レハ随テ記シ積テ一小冊子ヲ成ス頃者更ニ之ヲ増訂シ又海外貿易品ノ名ヲ加ヘテ之ヲ英和商語集と題ス

実はここに、望月誠に関する貴重な情報が含まれている。内務省に勸商局が出来たときにその吏員になったこと、

そこで翻訳の仕事をしていたこと、本書はその仕事の傍ら自ら調べ記した英単語集をもとに作られたこと。自分の瑣録だが、今商学が盛んになる状況のなかで翻訳の訳例に苦しみ私のような若者がきつといるはずなので、机の引き出しに私しておくよりも広く同学の士に分ち、切磋の益を共にしたほうが良いと考えた、これを見る人は遺漏を補い誤謬を正してほしいと書く。著者の率直さが表れているといえよう。内田魯庵は「糊と鋏で細工したもので、かりで、…碌なものは無かった」と酷評するが、糊と鋏の違いは無いけれど、金儲けだけに目がくらんでいる人物とばかりはいえないのではないか。

さて、内務省に勤めていたと自ら述べているが、「明治初期の官員録・職員録<sup>\*16</sup>」を調べると、たしかに明治九年の内務省勸業寮の欄に、十一等出仕として「ナガノ 望月誠」とその名前が載っている。同書の明治八年にも同じ記載がある。それ以前には見当たらず、十年にはその名が消えているので、八年から九年にかけて勤務し翻訳業務にあたっていたとしてよからう。出身地は長野県である。それは明治十一年発行の望月誠著『亭主の心得』扉に「出版人長野県士族望月誠」と記していることでも確認できる。長野県が一県としてまとまるのは明治九年で、江戸時代後期に現在の長野市は幕府領であった。彼は長野県のどこかの藩か、あるいは幕府領の長野出身の武士で、洋学を学び明治八年に内務省に勤務した。

明治十年には望月誠の編で『子育ての草紙』第一―八号を由己社という版元から刊行しているので、このころ官庁を辞して出版の道へ進んだと思われる。これらを総合すると思誠堂（兎屋の別名でもあり前身）の創立は明治十一年と考えられる。また、明治十四年の「東京書林組合規約書改正願<sup>\*17</sup>」（東京府知事宛）のなかに、望月誠は委員の一人として名を連ねている。明治十四年には、活発な出版活動をおこなっていたことを前章で確認したように、書

物問屋仲間にもその存在を認められ、有力視されていたのだろう。

ここまで判明した事実、若干の推測を加えて望月誠の生涯を整理しとめてみると次のようにいえる。

彼は弘化四年（一八四七年）ころ、信州のどこかの藩の武士に生まれ、青雲の志をもっておそらく江戸で洋学を学び英語を習得し、福沢諭吉らが唱える西洋文明の啓蒙書に大いに刺激をうける。明治五年、六年には翻訳書を老舗の書肆から刊行（この時を二十代半ばとして生年を推測）。明治八年には内務省勸業寮に第十一等出仕として勤務。通商関係の文書の翻訳に従事する。時代の先端は商業にありと実感する。明治十年には役所を退職し、十一年に思誠堂を銀座の南鍋町一丁目七番地に開業、もっぱら自分の著書（家庭論や商売論など）を刊行する。十二年にうさぎ屋誠の屋号を名乗り、十三年ころから本格的な出版活動を開始、明治十四年には書林組合の委員をつとめ、出版界に地歩を築く。十六年から十九年にかけて、兎屋は全盛をむかえる。大阪・函館・名古屋に支店をもち、横浜に代理店を置き、姉妹会社として法帖屋を開店、さまざまな販売法をあみだし、本の安売りで儲け、人力車を乗り回すほどになる。十九年には自著を再び著す（英語実用書と簿記の本）。明治二十年と二十一年には長期にわたり東北地方を旅行する。このころから出版にそれほど積極的ではなくなり刊行書目の数も減っていく、明治二十三年を最後に出版から身を引き、その後の活動がわからなくなる。しかし、明治四十二から四十五年にかけて、三樂堂という書肆を開き、<sup>\*18</sup> 隠居仕事のように書道関係の本を自ら編集し刊行する。このころ望月樂園と名乗る（先の年齢推定に従えば六十五歳前後か）。

## 商業と出版——独立と自由のために

望月誠は内務官僚の道に見切りをつけて、出版を志した。彼が著述した英語の翻訳、商業論、家庭論の内容から、出版業への転身の動機が探れるだろうか。『活計論』は、家計論ではなく、収入を得て自立することがいかに大切かを説くものだった。収入の道は官、商、工、農それぞれ千差万別だが、商業こそがこれからの時代の主導的な職業であり、商こそ四民の最上に置くべきだと主張。官は安定しているが、わずかな棒給をやりくりするだけであり、農は人民の生命の元をなし重要だが、豊凶作を予期できず不安定、工は個人の技術・力量しだいである。商こそ富を獲得するに自在かつ独立的であり、自由を確立する可能性にあふれていると論じる。

また、『商人安心論』では、諸外国との交通が開かれて古来未曾有の刺激を生み、通商の可能性が大となった、万国の地理、気候、物産を知り、物の時価をわきまえて、人の便利と己の利益を計り、信用を得る商業はやりがいのある事業である。一国の富は、一人の富から興るものである。富強の国とするにはまず自らの家を富ますことを計るべきであるとする。さらに、「独立自由は知恵と富の花なり」とし、独立とは各自にその身を立て、家を興すことであり、助けを政府や他人に乞わずに生きることである。自由とは、自分で身体を守り、財産を管理する権利を持つことで、政府に委任して「生殺も与奪も政府まかせなりなど、奴隸氣象に此の世を送るの苦界を逃れ出たる」をいうのだと、政府などの有力者に頼らずに生きることの重要性を強調する。そのために勉強と忍耐を種とし、知恵と富という根をのばし、独立という幹を成長させて自由の花を開かせなければならない。独立をめざし、自由を保つことができるという希望をもって、商人社会に懸けようではないかと熱っぽく語る。

これらの行間から、望月誠が内務省の官吏を二年間で辞めた理由がうかがわれる。つまり独立と自由を手に入れ

るためには政府や、官に頼ってはいられないという意識である。内務省の勸業寮で、望月は産業部門の英米の本や文書を翻訳し、新しい商業の知識を仕込んでいた。『活計論』や『致富の要訣』ではいわゆる「士族の商法」の失敗を繰り返さぬようにと、こまごまとした商売上の注意を述べるが、その基調は「信用」の大事さという点である。

#### 文筆家——そこそこの教養人

望月誠は、官吏を辞めて商業を志したが、他の商売を選ばずに出版に向ったのはなぜだろうか。また、出版の手始めに著した本が、『亭主の心得』『女房の心得』『おさんの穴』といった通俗的な家庭書だった理由があるのだろうか。

望月は商売で成功することをめざすと同時に、文筆で立ちたいと考えたのではないか。役人をやめたとき既に四冊の書を著し、出版という商売は彼の身近にあつて、自由と独立を実現する舞台であつた。明治十二年までは出版社業に力をそそぐというより、自分の本を発行し売りさばくための「思誠堂・うさぎ屋」だった。

彼にとって自分が本を書くことと、商売上の成功は、同時に成り立たせなければならなかった。よく売れる本と何か、庶民は何を求めているかを考え、家庭・女・子供にターゲットをしばった出版からはじめたのだろう。また家庭を成り立たせること、つまり彼の言う「活計」が、新しい経済社会の基盤をなす最も重要なものであるという主張に合致したともいえる。『亭主の心得』『おさんの穴』などは、他愛の無いものだが、『亭主の心得』は亭主の権威をうたったものではなく、夫婦の関係をよくするために夫が心得ねばならない女房への思いやりを説き、フェミニスティックな立場を示し、『おさんの穴』は世の中の「女中」の立場を描き、彼女らの愚痴の口調を再現

して笑いながら読ませてしまいうなかなかの名文である。教訓調が残っているのが難といえ難だが、当時はまだ『女大学』などが読まれており、その延長上にあるわけだと思つて読めば、『女大学』に対する諷刺もうかがわれ、ユーモアのセンスが感じられる。

### 兎屋の出版戦略

兎屋は、家庭実用書や歴史実話などを次々と出版したが、自らの大衆路線をどのように認識していたかを示す広告の一文がある。「書籍商は各商業中の第一位に位する上等の業なれば自然に上品ぶつて古来例なき事は仮令お客様御便利なる事にもせよ為さざるの慣習なれど……」大売出しをやる宣言しているのである（明治十七年十二月九日「読売」）。書籍業は上等の商売という当時の見方がわかると同時に、自分たち（兎屋）の商売の仕方が上品ではないことを認めたくなくて、商売というのはこうするのだ開き直り、書籍を「商品」の一つとして扱おうとしている。このような態度は、江戸以来の書林仲間にとっては抵抗が大きかつたし、西洋思想の啓蒙につとめた著者や版元の反発も買ったと思われる。現代の出版社でも再販売価格維持制度をめぐる「書籍は単なる商品か」という議論をたたかわせているのだから……。良し悪しは別にして兎屋の方針は画期的であつた。

先にも見たように、自分たちは「活きたる眼をもちたるが幸ひに機を見時を察し世の潮勢に先んじて刊行」したから成功したと述べるように、はつきりと路線を意識していた。後に大出版社に成長した博文館や実業之日本社、さらには明治末に創業した講談社の雑誌路線は兎屋のそれと基本的には変わらないといえよう。

しかし、出版業界が拡大を開始する明治二十年代を待たずに、兎屋は出版活動を止めてしまう。その理由ははっ

きりとしない。兎屋は有力な著者との連繋が見られぬという弱点があったが、こういうところに長つづきしなかった理由を見出せるかもしれない。経営的に行き詰まったのかもしれないが、失敗したという明らかな証拠もない。むしろ自ら出版をやめた可能性がつよいと思う。

明治初年から十年代に創業した新興の出版社の主なものを挙げてみると、丸善(明治二)、慶応義塾出版局(同年)、のちに「読売新聞」を創刊する日就社(三年)、金港堂(八年)、有斐閣(十年)、春陽堂(十一年)、三省堂(十四年)、駿々堂(十五年)、中央公論社の前身の反省会(十九年)、大取次となる東海堂(同年)、河出書房の前身の成美堂(同年)、富山房(同年)などがあり、創立当初は古本屋だったり、ごく小規模な出版社だったりするが、現在まで存続する店もかなりある。明治二十年にはその後の出版界をリードすることになる博文館が創業し、出版の様相が産業化へむけて大きく変化していく。これらの出版社はそれぞれ得意ジャンルを確立し、紆余曲折をへながらも企業として持続する努力をした。それに対し、機を見るに敏で、さまざまなアイデアを連発し、商売もうまかったはずの兎屋は時代の波に乗らずに消えていった。

## 結 語

冒頭に引用したように、前田愛は、「兎屋は書籍をたんなる商品に還元し近世的な販売機構を解体させる役割を果たしたが、投機的な経営方針は、資本主義化した近代的な出版業が登場するまでの過渡期を象徴するものだった」と言う。たしかにその通りなのだろう。しかし、長期の旅に出た望月誠の後ろ姿を想像すると、やや違った見方も許されるのではないか。

近代の出版史は、近世的な機構からの脱却、印刷技術の革新、販売流通制度の整備・拡充、経営システムの改良などによって「発展」してきたとされている。それらの研究は、近代文学史や思想史の研究と同様に、「近代化」がいかに図られたかという文脈で語られてきたために、現代につながる大出版社を中心に捉えようとする傾向が強く、兎屋のような一見、旧時代の残滓を引きずる大衆志向の出版社については十分に顧みられなかった。

しかし、振り返ってみれば出版という仕事は、多くの点で江戸・明治以来変わらぬ要素を抱えて現在まで来ているともいえるだろう。著者と版元の関係、定価販売にこだわる版元と書店の関係、新聞広告のありかた、斬新な企画と追隨企画、出版社内部の人間関係などが実はそうである。逆に今まで見てきたように明治初期に兎屋が新しく始めた試みはあるところ時代の魁であった。書籍切手の発行などのさまざまな販売手法、新聞広告の語り口、企画の立て方、糊と鋏の本作りなどは、後に続く多くの出版社がみなまねをしたことである。出版業は近代化にむかつて発展してきたという見方を一たん脇に置いて考え直すと、兎屋は時代をこえた出版業の本質的な一面を表していると思う。

出版社は、まず自分が出したい本を造ることから出発する。出版は製造業というより商業の範疇に入れたほうがふさわしく、本を売る努力はするが、結果として失敗しても出したいものを世に送ったのだから仕方がないとあきらめるいさぎよい気風をもつ。出版社は毎月新しいものを生み出すという意味で、常に「無」であり、出したい本が思い浮かばなくなったら、著者との繋りが切れたらそれで終わりであり、構築的でなく本来「仮設的」な存在である。出版が賭けⅡ投機であり、対象への思い入れの強さをあらわす器であり、仮設性を本源とする営為であるとするれば、出版史の研究は、失われ、忘れられた出版社の営みと意思にもっと光をあてることが重要になるだろう。



望月誠の兎屋は出版物として後世に残るようなものをつくらなかったかもしれない。出版社を持続的に発展させることに失敗したのかもしれない。しかし、望月誠は商売に失敗したわけではない。出版という商売で自由を得た。兎屋誠は、そこそこの教養ではあったが、その教養を遊び楽しむ術を心得ていた。多くの人々にとって明治以降の啓蒙によって培われた「教養」とは、文明開化の道具であり、刻苦勉励の対象であり、政治・経済・社会の制度の守り神であり、まじめ一方のものであったが、彼は教養を遊びとし大衆化しようとした。自らの商売Ⅱ出版で一儲けし、人々は次第に望月が心配せずとも「活計」にめざめ、商業は盛んになっていった。望月誠が出版社でやるべきことは終わったのである。私は旅に出た望月の後ろ姿にそれを見るのである。

#### 注

- \* 1 「銀座繁盛記」昭和四年、『中央公論』所載。『魯庵隨筆読書放浪』（東洋文庫六三、平凡社、一九九六年）
- \* 2 田山花袋『東京の三十年』初版は一九一七年、博文館。のち岩波文庫所収。
- \* 3 大久保久雄「長尾景弼と博聞社」（『本の周辺』7号、一九七六年）によれば、博聞社は、明治四年、芝愛宕下に書籍出版と印刷業を兼営して創業。大蔵省関係の発行物を請い、明治九年頃銀座に進出し、法律書など多くの出版を行ない、明治二十五、六年頃が全盛期だったという。
- \* 4 前田愛『近代読者の成立』所収、一九七三年、有精堂
- \* 5 明治四十二年から四十五年にかけて望月が編者となった書道の本の発行所は、「三楽堂」、出版人が望月誠となっており、両者の住所が一致している。このころ望月は三楽堂という書肆を開いていたことが判明。「望月樂園」と号し、住所は下谷区御徒士町三丁目五十九番地となっており、銀座から移ったのだろう。
- \* 6 磯部敦「東京稗史出版社とその周辺」（『日本出版学会会報』98号、一九九九年七月）は、東京稗史出版社が流通網を確保するために泉市（山中市兵衛）に接近したこと、新興出版社と旧地本問屋との関係について記している。望月誠と泉市の

関係もこれに近いと考えられる。

- \* 7 宮武外骨「明治奇態流行情」(『明治奇聞』所収、一九九七年、河出書房新社)
- \* 8 ロバート・キャンベル「東京鳳文館の歳月」(『江戸文学』十五・十六号所収、一九九六年、ぺりかん社)は、兎屋と同時代に新興出版社として東京・銀座で活躍した鳳文館の盛衰を丹念に掘り起こしている。中国公使館員と日本人との交流については、張偉雄『文人外交官の明治日本』(一九九九年、柏書房)を参照されたい。

- \* 9 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』講談社
- \* 10 石川巖『明治初期戯作年表』(一九二七年、從吾所好社)
- \* 11 内田魯庵「銀座と築地の憶出」(『魯庵の明治』所収、講談社学芸文庫)
- \* 12 依田学海『学海日録』五卷(一九九二年、岩波書店)。依田学海との交流の様子から、松村操は兎屋の企画編集顧問のような仕事をしていた可能性が高いと思われる。
- \* 13 弥吉光長「明治前期出版界の動向」(『弥吉光長著作集4』所収、一九八二年、内外アソシエーツ)
- \* 14 柳田泉編「明治初期翻訳文藝年表」(『明治文化全集』三卷、日本評論社)
- \* 15 民間出版社が編集し刊行した、最も古い百科事典的なものは田口卯吉編『日本社会事象』二卷(明治二十三年)、同文館『大日本百科辞書』(明治三十四年計画)、三省堂『大日本百科辞書』(明治四十一年第一卷)などである。
- \* 16 「明治初期歴史文献資料集」第一集 寺岡書洞
- \* 17 弥吉光長「明治初年の出版団体その一」に掲げられた東京都公文書館蔵廻議録「東京書林組合規約書」による。(『明治時代の出版と人』所収、一九八二年、内外アソシエーツ)
- \* 18 前掲\*4参照。

付記 本稿は、山口昌男先生の「うさぎ屋という面白い本屋があるから調べてみないか」という一言から出発した。結果はうさぎ屋の相貌の簡略なスケッチに留まったが、明治初期の出版文化に関する研究はまだまだ未開拓であることを知った。今後さらに調査を続けたいと思う。

兎屋誠関係年譜

刊行年	著・編者	出版物タイトル	版元	備考（主な広告）
明治五・九	望月誠編	訓蒙窮理便解	甘泉堂	
六・二	可德斯米（ゴールドスミス） 著／望月誠訳	万国地理啓蒙	和泉屋市兵衛	
九・十二	望月誠	英和商語集	望月誠	
明治十	望月誠編	子育の草紙 第1～8号	由己社	
十一・三	望月誠 正編	万国地誌略熟字解	京都・博文堂	
十一・九	望月誠	女房の心得	思誠堂	
十一・十	望月誠	亭主の心得	思誠堂	
十一	九岐晰	小学庭訓	望月誠	
十一・十	九岐晰	子供の心得2版	思誠堂	
明治十二・一	望月誠	致富の要訣	思誠堂	
十二・五	望月誠	早起の効能	うさぎ屋誠 和泉屋市兵衛	
十二・六	清水了随	福運の窩	思誠堂	
十二・七	望月誠	記憶拡充論	思誠堂	
十二・八	望月誠	おさんの穴	思誠堂	
十二・九	望月誠	活計論	うさぎや誠	
十二・九	望月誠	心の養生	思誠堂	
十二・十	清水了随	難字類編 上	思誠堂	
十二・十	望月誠	商人安心論	思誠堂	
十二・十	三橋惇	今世支那事情	思誠堂	
十三・一	望月誠	手軽西洋料理法（十九年駿々堂で再刊）	うさぎ屋誠	

十三・二	望月誠編	懷妊避妊自在法・有夫姦檢察法並予防法	兎屋誠	「報知」 広告
十三・三	松村操	家政妙論 実地経験	思誠堂	
十三・三	笈昇三	西洋新法実地早算	兎屋誠	
十三・八	九岐晰	通俗国会の主意 附・日本国会方法論	思誠堂	
十三・十	九岐晰	台所規則 一名・厨房宝箴	望月誠	
十三	松村操	大臣参議諸公略伝	兎屋誠	
明治十四・一	井上勤訳 ハーバート・スペンサー／	女権真論	思誠堂	
十四・七	津田権平編	夫婦互の裁判 閨門律令	望月誠	
十四・十一	井上勤編	第一世拿破崙言行録	思誠堂	
十四・十一	松村操編	演説金針	思誠堂	
十四	中村敬宇（正直）	敬宇先生詩文偶抄	兎屋誠	
十四	赤塚錦三郎	生命保険	兎屋誠	
十四	赤塚錦三郎	第二回内国勸業博覧会	兎屋誠	
十四	大久保常吉	廟堂人物論	兎屋誠	
十四	津田権平	明治立志編 一名・民間英名伝	兎屋誠	
十四	松村操編	明治外史 第1―6編	思誠堂	
十四	松村操	東京穴探 初―3編	思誠堂	
十四	大久保常吉	琉球事件日清談判始末 前編	兎屋誠	
十五	赤塚錦三郎編	勸進帳 演劇叢書	兎屋誠	
十五・二	トーマス・モール／井上勤訳	良政府談	思誠堂	
十五	チャールズ・デッケンズ／ 加藤鶴太郎訳	西洋夫婦事情	兎屋誠	
十五	松村操編	山陽言行録・象山言行録	兎屋誠、思誠堂	

十五	松村操（春風）編	実事譚 7冊合本	兎屋誠	
十五	赤塚錦三郎編	西洋新法独判断 一名・黄金車独占	兎屋誠	
十五	根村熊五郎	朝鮮近情	兎屋	
十五	松村操抄訳	通俗情史 巻2	兎屋誠	
十五	鶴屋南北	東海道四谷怪談 演劇叢書	兎屋誠	
十五	松村操（春風）著	日本水滸伝	兎屋誠	
十五	大久保常吉	日本政党事情	兎屋誠	
十五	松村操（春風）訳	金瓶梅 6冊	兎屋誠	
十五	松村操編訳	通俗後西遊記	兎屋誠	
十五	松村操編訳	通俗水滸後伝	兎屋誠	
明治十六	松村操（春風）	実々事譚 2冊	兎屋誠	
十六	望月誠編	伝家宝	兎屋誠	
十六	山東京伝 望月誠編	京伝翁叢書	乾坤堂 （兎屋支店）	
十六	津田権平	家事不取締の影響	望月誠	
十六	根村熊五郎（有信斎主人）	姦婦の改心薬 附・妻妾行状を素すの原因	望月誠	
十六・八	平氏記 松村操修選	演義日本外史	思誠堂	
十六・九	根村熊五郎（有信斎主人）編	夫婦の後悔	望月誠	
十六・九	根村熊五郎	交際及対話の注意	望月誠	
十六・九	根村熊五郎	人に嫌はるる種	望月誠	
十六・十	根村熊五郎	災難の予防 一名・油断大敵	望月誠	
十六・十	根村熊五郎	女房の義務 附・夫婦不和を生ずる原因	望月誠	
十六・十一	トーマス・モール／井上勤訳	新政府組織談（「良政府談」改題）	思誠堂	
十六・十一	望月誠編	伝家宝 統	思誠堂	
十六	滝沢馬琴 柴野謹吾、望月誠編	馬琴翁叢書 第1輯	乾坤堂	

十六	松村春風	昔語古物会	兎屋誠	
十七・二		鎌倉北条九代記	思誠堂	
十七・二	酒井忠誠	明治十六年各政党盛衰記 後藤陸奥二氏去就論	思誠堂	
十七・二・七				兎屋名古屋支店開業祝いの広告「報知」
十七・三・十一				法帖店開業広告「報知」
十七・三・十九				書籍切手発行之主意広告「報知」
十七・五		独逸政略秘聞録	兎屋誠	「報知」 (十七・五・九) 広告
十七・五?	曲亭馬琴 斎東野人批評	里見八大伝	兎屋誠	「報知」 (十七・五・十五) 広告 兎屋横浜代理店開業 広告「報知」
十七・六・四				
十七・七	顔真卿書	筆法十二意	望月誠	
十七・十	王羲之	草書千字文	望月誠	
十七	英立雪	宗教世界膝栗毛	兎屋大阪支店	
十七	根村熊五郎訳	東遊記	兎屋誠	
十七	滝沢馬琴	大和莊子蝶胥筭	兎屋誠	天狗書林兎屋売出し 広告 八大伝「報知」
十七・十一・七				
明治十八	不詳	隠顕曾我物語	兎屋	

十八	醉多道士	芸娼妓手くだの内幕 一名・粋の解わけ	兎屋支店、横山帯川堂	
十八	福永美智編	身体衛生第一の心得 絵入り	兎屋	
十八		通俗漢楚軍談 絵入り	兎屋	
十八	十返舎一九	東海道中膝栗毛	兎屋誠	
十八	望月誠	長生の基 一名・飲食の心得	兎屋誠	
十八	滝沢馬琴	昔語質屋庫	兎屋	
十八・十二・				本の景品付き安売り広告「日日」
十七				
十九	望月誠	英語文通自在	望月誠	
十九	望月誠	商用簿記	兎屋	
十九	九岐晰	通俗国会の主意 附・日本国会方法論	兎屋支店	
十九		通俗宋元軍団	兎屋誠	
明治二十・五	杉山藤次郎編	通俗那波列翁軍記	望月誠	
二十・八	曾先之 大久保常吉訳	通俗十八史略	望月誠	
二十	富田昌寿	勸学運動歌 小学生徒	兎屋支店	
二十	西澁著 吉田熹六記	実地遊覧西洋風俗記	兎屋支店	
二十	中村豊之助編	通俗大日本史	兎屋誠	
二十	維児機胡林斯（ウィルキイ・コリンズ）／井上勤訳	妻の嘆 政治小説	兎屋書店	
二十	藤井儀一郎	日用重宝記	兎屋	
二十	中村豊之助編	美少年録	兎屋、銀花堂	
二十一	松本芳忠	象山翁事跡	兎屋誠	
二十一	横山泰次郎	席上游戲佐和理集	兎屋支店	
二十一	片岡春子編	庭の訓 児童教育	兎屋	

二十一	井上勤訳	六ヶ月間英語卒業書	望月誠	
二十一	英国ジョージ／島尾岩太郎訳	政治小説 小人国発見録	兎屋誠	
二十一	横山泰次郎編	郵便路線町村里程分図詳覧	兎屋支店	
二十一	石橋中和	大日本実地真景名所図会大全	兎屋	
二十一・十・十一				特別安売広告370冊余 （「朝日」）
二十一・十・十七				書籍交換便利売広告 （「報知」）
二十一・十・二・一				実事譚、伝家宝広告 （「報知」）
明治二十二	田幡利三郎	町村制度適用等級課税均一算	兎屋支店	
二十一	木村知治	帝国議会衆議院選挙人心得	兎屋	
二十一	川原梶三郎（閑古）	帝国憲法説明通俗問答	兎屋	
二十一	花房義実	通俗農工商演説	兎屋書店	
二十三	哭天居士編	西郷奇聞 英雄未死魂	兎屋書店	
明治十二・十二	望月誠（楽園）編	日用草字彙	三楽堂	
四十二・十二	望月誠（楽園）編小泉松塘書	現代式手紙の材料	晚晴堂	
四十三	加藤千蔭書 望月誠編	つくりがなのいろいろ	望月誠	
四十四・五	茂木蔵之助	静脈内注入療法	思誠堂	
四十四・十二	望月誠（楽園）編小泉松塘書	平仮名と万葉仮名	晚晴堂	
四十五・七	望月誠	時代の要求に伴ふ研究に基いて改良したる 主食米炊飯調理新法（再版か）	三楽堂	